

聲明 しょうみょう



聲明とは、お経に旋律をつけて唱える仏教音楽である。聲明はインドから中国を経て日本には平安時代、空海によって伝えられた。以来、古人の並々ならぬ努力によって現在に伝承されている。日本音楽の原点の一つとも言われ、人間の肉声による単純かつ複雑な古典音楽である。奈良の長谷寺を総本山とする真言宗豊山派の聲明は、花の御寺の名にふさわしく、明るく華やかな響きを持っていることが特徴といわれている。93年真言宗豊山派僧侶千人による日本武道館公演『千僧音曼荼羅』を始め、94年ベルギー・ポルトガル公演『百僧音曼荼羅』、長岡市『生命の響き』、95年越谷市『生命讃歌』、08年真言宗豊山派仏教青年会50周年聲明・太鼓コンサート『響愛』、国立劇場に於いての公演、全国各地にて大小さまざまな公演活動を行っている。

豊山太鼓 千響 ぶざんだいこ せんきょう

平成21年、真言宗豊山派の青年僧侶で構成される仏教青年会に組織された僧侶だけの太鼓衆。日々、祈願や回向の際に太鼓を打つ傍ら、林英哲氏に作曲いただいた『六大響(ろくだいきょう)』『不動響炎(ふどうきょうえん)』の演奏を中心とした形式にこだわらない様々な公演活動を通じて、聴衆に心の安寧と元気と勇気をとどけている。また、大震災以来、被災地へ出向き太鼓演奏を行いつつ東京近郊をはじめ、奈良東大寺・京都清水寺等でチャリティー公演を行っている。

英哲風雲の会 えいてつふううんのかい

日本各地で活躍する若手太鼓奏者の中から、林英哲の音楽に共鳴する実力者が揃う太鼓ユニット。林英哲コンサートのアンサンブルメンバーとして活動する他、独自の演奏活動も行う、いずれも次世代を担う俊英たちである。

93年林英哲プロデュースで太鼓揃い打ちの創作曲「七星」(作曲:林英哲)演奏のため全国から選り抜かれた太鼓打ちの精鋭による特別編成のステージが母体となり、現在では流動的に十数名で構成されていて、ソロで活動する林英哲がアンサンブルを行うとき、必要な人数が参集する。

07年は林英哲ソロ活動25周年記念公演でオーケストラとの競演も果たしている。また12年9月には国立劇場主催『日本の太鼓』公演で、林英哲監修の元『光の群像』と題しメンバー創作曲中心でトリを務めるなど、「英哲風雲の会」単独で国内外の公演も行い、その圧倒的な迫力とライブパフォーマンスは大反響を呼んでいる。

「風雲の会」とは広辞苑に「英傑などが時機に乗じて志を達する好機」とあり、活動の精神と通うことから会の名に転用した。

上田 秀一郎 (うへだしゅういちろう) <http://www.shuichiroueda.jp/newsletter.html>



上田秀一郎(兵庫県出身) 平成八年、英哲風雲の会に参加。ソリストとしてもジャンルを越えた様々なアーティストたちと共演し、独自の音楽世界を表現し続ける。師匠の推挙により二十年より平成中村座『夏祭浪花鑑』に太鼓奏者として出演。2012年五月二十二日東京スカイツリーグランドオープニングでの演奏など、その活動を国内外に広げる。

はせみぎた <http://www.granbeats.com>



はせみぎた(静岡県出身) 学生時代よりプロ活動を目指し、平成十二年、太鼓デュオ「ようそろ」を結成、独自の演奏スタイルで、国内外でのコンサートに加え、太鼓演奏での映画出演、学校公演・ワークショップなど、幅広い活動を展開。また同年より英哲風雲の会に属し、数々の大舞台で太鼓ソリストとしての研鑽を積む。2011年、初の完全ソロ公演を実施。

田代 誠 (たしろまこと)



田代誠(福岡県出身) 平成十六年、英哲風雲の会に参加。2012年、師匠の推挙によりシンガポール吹奏楽団でのソリストデビューも実現。また、昨年二度目のソロ公演を開催し多大な評価を受ける。日本の伝統芸能、民俗芸能などから触発され、現代にも通じる舞台芸術や演奏活動を展開。新作演劇やパフォーマンスアートなど様々な分野とも共演している。

辻 祐 (つじたすく)



辻祐(福岡県出身) 十二歳で林英哲の舞台に感銘を受けて太鼓奏者を志し、剣舞やモダンバレエ、ドラムなど様々なジャンルの表現・創作活動を体験・吸収しながら、新しい表現分野の太鼓を模索。大学卒業後、平成二十二年より英哲風雲の会最年少メンバーとして参加を許され、林英哲の内外の舞台に同行、活動の場を広げている。

〈発売開始〉平成26年3月18日(火) 春彼岸の入り~予約・販売

問い合わせ: 実行委員長 渡辺 TEL.090-1693-6485 事務局 馬場 TEL.090-3097-8836

〈久喜総合文化会館へのアクセス〉 www.kuki-bunka.jp/

JR・東武鉄道久喜駅西口より徒歩15分 久喜インターチェンジより車で約5分

〒346-0022 埼玉県久喜市下早見140番地



同じ空の下から被災地の一日も早い復興への祈りをここした。